

日本科学哲学学会第 40 回大会ワークショップ

「感情の自然化はいかなる意味で可能か？」

中京大学 長滝祥司

本発表では、感情とはいかなるものなのかという問題について、その起源ないし形成過程を意識しつつ考察していく。具体的には、感情の自然化を念頭に置きながら次の三点を概観する。すなわち、感情は 人類に普遍的なものか文化によって多様なものか、 生得的なものか学習されるものか、 進化の過程で適応的に形成されたものか、文化的社会的に構成されたものか、である。そのうえで、感情と身体との関係を改めて問い直してみる。ここでは、身体概念をどう捉え直していくかという問題に焦点をあてる。身体概念を再考することによって、感情をめぐる上記の対立に決着をあたえ、感情の自然科学的研究に新たな視点を提供したい。

脳神経科学や進化論による自然主義的な説明は、感情の普遍性や生得性を支える材料を提供している。たとえば、恐れという感情についてはこうである。われわれは怖いから逃げる。恐れは、危険を察知し、逃げるという行動を発動する力を持っており、この機能のおかげで人間をふくむある種の生物たちは生き残る可能性を増大させることができたのだ。恐れは、それが進化の産物であり、生存してきた人類に普遍的で生得的であるという主張をうまく説明することになる。また、進化心理学的な考えかたによれば、感情は身体表現とむすびつくだけでなく、不随意で制御の難しいものである。かれらによれば、感情はくしゃみのように自発的な制御をこえたものであり、学習されるものではない。いっぽうで、おなじ恐れといってもそのなかにはもっと意識的な思考をとまなうものもあると感情の社会構成主義者は主張する。たとえば、複雑に絡み合った社会的人間関係のなかで生じる恐れなどを念頭においてほしい。あるいは、入り組んだ道徳的推論によって起こる恐れなどもあるだろう。つまり、恐れのような基礎感情も身体反応だけに還元されない社会的・文化的側面をもつということである。恐れのような基礎的感情の事例をみても、感情をめぐる普遍性と文化的多様性、生得性と後天性、自然主義と反自然主義といった対立をめぐる、各々の立場にそれなりの根拠があり、どちらか一方を完全に肯定し、他方を完全に否定しすることは難しい。

うえに記述したような対立に決着がつかないとしても、あるいは、感情がいかなる起源をもっているにせよ、それが身体的な基盤をもつということは否定できない。ただし、感情のすべてに身体が関与していることを認めたとしても、身体は脳のニューロンの状態変化、ホルモン分泌、心拍数や血流の増加といった客観的身体のもつ生理学的な側面につけるわけではない。そこで、身体あるいは身体性とは何かという問いかけをあらためてする必要が生じるのである。

ひとことで身体といってもさまざまな様相がある。本発表では、歴史的な形成プロセスと人称性というふたつの観点から身体概念を捉えていく。第一の観点によって、感情が進化によって形成された生得的で普遍的なものか、文化的に学習される後天的で多様なものかという争いを調停するような論点をあたえ、第二の観点によって感情の自然科学的研究にひとつの提言をおこなう。後者は、感情の自然化に新たな視点を提供するものとなる。